

うるおいプラス



山地 竜馬

常連客と談笑する三宅さん。「商品を売り買いするだけでなく、直接触れ合う場を大切にしたい」店内に展示している鉄道模型。三宅さんが独自の工夫を施した車両も並ぶ



に成長を見守る「おやし」がそこにいた。
(佐々木直樹)
◇汽笛堂11092(82
2)05063。

生

ふらりと旅した屋久島で、口永良部島という島があると聞いた。フェリーで1時間40分、人口1500人。その形から「ひょうたん島」と呼ばれているらしい。そんな小さな島で、人々はどんな暮らしをしているのか。民宿のおかみさんから聞いた「ヨットマン」と呼ばれる人だけを頼りに、フェリーに飛び乗った。



ぶらり旅 移住決めた

港には色黒のおやじが立っていた。ヨットマンだった。「観光かね?」「いえ、この島の生活が知りたくて」「おい(俺)の仕事を手伝えよ」と、交渉が成立し、車に乗った。道路には竹が生い茂り、鹿や牛が横切る。信号もない山道を30分ほど行くと小

シを収穫した。そばにあった牛舎では大きな牛を間近に見た。ヨットマンは一人で民宿を営み、伊勢エビ漁をしながら肉用の黒毛和牛を飼っている。夜はもちろんヨットマンの民宿。客として来たはずなのに、なぜか夕食は「自分で作れ」。冷蔵庫

に人間らしく生きたい」という願望を、この島で見た気がしたのだ。別の日、「また来ます」と告げ、いったん奈良県の実家に戻った。父が興じた小さな会社で全国を飛び回りながら、経済的利益、既存の価値観が最優先される社会や人間関係に、疑問を

さな港に着いた。初めて漁船に乗り、伊勢エビ漁へ出る。終わると作業着に着替えて、猛暑の下、トウモロコ

の食材は新鮮でも豊富でもなかったが、漁で捕った伊勢エビと刺し身を出してくれた。慣れない芋焼酎もなぜかおいしく感じた。衝撃の一日だった。

翌日帰る予定を延ばし、7日分の宿代を払った。明日、帰れば来ることはない」と感じたからだった。心のどこかにあった「自然と共



ありのままの暮らしを目指す山地竜馬さん

やまち・たつま 1979年、堺市生まれ。2007年秋、鹿児島県屋久島町・口永良部島に移住。島で新たな仕事をつくり、自然と共に人間らしく生きられる社会を目指す「ひょうたんじまプロジェクト」を展開。一般社団法人「へきんこの会」代表理事。

5月... 入院... よ... た。4時... るいろ... 31日... ると... はかな...

